
初めての敗戦

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めての敗戦

【Nコード】

N8327Z

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

人間の心を守るカオス。巢食うソーサラー。彼等の戦いは人間の見えない所で始まっていた。

南条 列。またの名を烈火のシャクヤ。南条 隼人。またの名をシルバーオックス。祐希 みずほ。またの名を水虎のキョウカ。パトリック・レドガー。またの名を鋼のトウゴウ。彼等はカオス予備軍の学生だった。

ある日、昔の同僚エドワード・スカイがソーサラの毒素に感染した。彼はソーサラ軍の夜叉の鴉に故郷を滅ぼされていた。そのトラウマから、カオス軍が弱すぎたから滅ぼされたのだと悟り、ソーサラ軍に寝返るのだった。列と隼人の父、ソーサラ軍のスパイダーから力を引き受けたエドワードは夜叉の死神と名乗り、廃墟となった病院の医者の精神に介入し一夜にして病院を完全制覇する死神。遂にカオス予備軍と夜叉の死神の対決が始まるのだった。

初めての敗戦

四人は格納庫に走った。

「スノ……………スノ……………アア、見つけますの！みずほさんでスノー」
「アラ、スノちゃん。どうしたの？」
「コレですの。受けとりまスノー」
「ナニ？ネツクレス？綺麗ね」
「スノ。お守りですの。後は、コレですの。お腹が空いた時にはこのキャンディーですの」
「ありがとうございます。スノちゃん。衛生士よね。後は任せたわ」
「ブイ！任せますの」
「水虎のキョウカ。マリリン プレッシャー。出ます！」

「パトリック。行くのか？」
「先生。アカデミック カイザー。第二軍の指揮をお願いします。行ってきます」
「命令だ。生きて帰れ。無理なら情報分析だけでも構わん。あえて言おう。頑張るなど。頑張つて無理するなら、生きろと」
「ありがとうございます。鋼のトウゴウ。スカイ プレッシャー。コレより任務につく」

「兄さん。これで最後かも知れない。だから伝えたい。貴方に会えて僕は幸せだった」
「まだだ。コレから、わかりあえる時が来るのだ。お前は俺が守る。我が命に換えても」
「ありがとうございます。兄さん。烈火のシャクヤ。ドリル プレッシャー。行けます！」
「シルバー オックス。ドリル プレッシャー 2号。出撃する！」

四機は人間の精神の世界に飛んだ。

「システム オール クリアー。全機。安定してます。無事、介入しました。これより目標地点へ向かいます」トウゴウが後方から解析する。「やけに静かね。本当にココなの？」キヨウカが様子を伺う。「気を抜くな。奴の縄張りに入っている」「なんだ？あの搭？あんな大きな搭が……………」「反応を確認。中からだ」

「ようこそ。諸君。迷う事はない。覚悟を決めたら、入って来るが良い」「学園長。あれは？」「……………夜叉の死神が人間の心を巢食い、搭を作った。気をつけて行くのだ。妨害電波を観測している。おそらく中では無線も通じないだろう。一塊になって行動したまえ」「わかりました。フォーメーションを変える。トウゴウ。君は前列に出て、誘導してくれ。俺は二列目を。キヨウカが三列目を。最後尾にシャクヤ。縦一列になり、異変があれば即、連絡する」「わかったよ。兄さん。皆、異論は？」「行きましょう。何かあれば引き返す。そうよね」「あくまでも偵察だ。第二軍の為にな」

四人はフォーメーションを変えた。

「よし。入るぞ皆。距離を詰める」

「死神様。連中が搭に入りました」「ウム。我等も行くか。バトル
アリーナへ。誘導しろ」

「前方、2時の方向に敵、確認！デット アントラー。三匹。撃ち
落とす」

ズガッガッガッガッ

トウゴウのマシガンが火を放つ。「滅殺。先に行くぞ」

「後方、6時。敵、確認。僕がやる」

ドシュッ！ドシュッ！

シヤクヤがレーザーを撃ち込む。「ヨツシャー！命中！」「気を抜くな！9時！敵 確認。十機。」「私がやるわ。ファンネル！」

ズバ！ズババツ！

「ヤッター！完全消滅。先に行くわよ」

「前方。大きなホールがある。行くぞ」

四人はドーム型のアリーナ。中央ホールに走った。

「誰もいない？トウゴウ。生体反応は？」「無し。……………イヤ！上だ！」

ガチャツ！ガチャツ！ガチャ！

「チツ…………… 囲まれた。気をつける！」

ドームの上の螺旋階段からライフルで彼等を狙うデット アントラー。
！。

「スチャツ。止めたまえ！私のゲームだ」手を上げ、制止する黒装束の男。ライフルを上げるデット アントラー。

「出てこい！カオス予備軍！マシンから出てこい！」「クッ…………… 支配権を取られたか…………… 出よう。皆」

手を上げてマシンから出る四人。

「この姿は初めてだな。ようこそ諸君。我が搭へ。歓迎するよ。私の下部を紹介しよう。出てこい！死神 四天王！」「我が名は、デット メイジ。死の魔術師。サア、幻惑の始まりだ」「ヒョヒョヒョ。デット モンク。死の格闘家でやんす」「私は、デット ワイパー。死の鞭使いよ。アラ、可愛い子ね。可愛がってあげるわ」「デット ナイト。死の剣士だ。俺の前に立つな」

「死の四天王か。厄介だな」「エエ。それぞれ役割が違うらしいですな」「私よりセクシー。……………負けた……………」
「ナンダヨー！あいつら！エツラソーニ」

「さて、ゲームを始めよう。一人づつやり合う。万が一、君らが勝ち残ったら、私が相手になろう。対戦者は君らに任せる。どうだね？サバイバル ゲームを始めかね？」
「条件がある。もしお前を倒したら、この場を引け！他の連中の介入は禁止だ！」「良からう。シャクヤ君。約束しよう」「兄さん！皆。最初は俺にやらせてくれ」「構わん。シャクヤ。最初は様子を見る。相手の出方を」「わかったらー。最初はお前だ！デット ナイト！俺の二刀流で切り裂いてやる！出てこい！」「私か？威勢だけは良さそうだな。烈火のシヤクヤ。相手になろう」「ヒョヒョヒョ。おらじゃネーノか？」「嫌ねー。お姉さんの好みだったのに。ジュルツ」「ナンダヨー。腰抜けか？俺だろ？普通」

「下がれ。お前たち。烈火のシヤクヤは俺の獲物だ」

「トウゴウ。分析を頼む。兄さんはアドバイスを。キョウカは他の奴等が介入しないように見張ってくれ」「バツクアップは任せとけ」

シヤクヤ。遠慮するな！」「任せとけて。なんてこと無いから。
サア！行くぞ！デット ナイト！お前は俺に勝てナイト！」

続く

初めての敗戦 その2

「サテ、私から素敵なプレゼントをしようか。ピーン」死神が指を鳴らす。地面が競り上がって来る。

「コッ……………これは」「ケイジマッチ。金網マッチだ。つまり二人しか入れない。デット ナイトと烈火のシャクヤのみ。奴め！完全決着か」「大丈夫かしら？シャクヤ。こんなルールでやった事無いんでしょ？」「いずれ俺達もこんなルールでやる事になる。すぐに。トウゴウ。学園長に連絡して衛生士の支度を」「ザーザー……………スノ。スノ。聴いてますの。わかりますの。任せるっチ」「スノちゃん。シャクヤの容態をすぐにこちらに転送出来るか？」「できませんノー。了解しますノー。ブイ」「……………トウゴウ。大丈夫か？あんなオチビさんで」「昨日調べてみた。最年少で大学院卒業後力オス軍の衛生士になった。今は頼るしかない。オツ！早いな。もう送られて来た」「確かにね。エリートじゃなきゃ園長も頼らないでしょうから」「トウゴウ、キョウカ。始まるみたいだ」

「シャクヤ。ソナタ、死を見たことがあるか？」「ヘッ。ねーからここに居るんだぜ」「左様か。宜しい」「俺も、1つ聞かせてくれ。何故、死神なんかの下に就いた？」「主は全て教えてくれた。この世界は歪んでいる事を。生き物のサガなのだよ。生きて行く限り、

破壊や洗脳、介入も免れない。それが自然なのだと。逆に問おう。シヤクヤ。お前は何故、弱き者を守る。人間は所詮、弱き器でしか生きられない。それを守る方が理不尽では無いかね？」「違う！確かに弱き者かも知れない。だが守る事で友愛が生まれるんだ。それが俺達の力や希望になる！」「フン。まだわからぬのか！たわけ者！平行線だと。カオスとソーサラーは平行線なのだと。貴様らが人の心を守れば守るだけ、こちらの勢力も増えていくのだと！愚かなカオス予備軍よ！行くぞ！」

デット ナイトはサヤを構え、目を閉じた。「上等だ！やってやらあ！」

「待て！シヤクヤ！忘れ物だ！」シルバーオックスが刀を投げる。「アツ！そうだ！俺、この前の戦いで兄さんに刀を貸してたんだ。サンキュー！カーツ！燃えてきたぜー！烈火！二刀流！」「ホウ。二刀流か。コンビネーション主体の攻めであるな。宜しい。そのスビード。デット ナイトが封じて差し上げよう」

遂にデット ナイトと烈火のシヤクヤの戦いが始まった。

「ウォーッ！アクセル！全快！行くぜー。烈火、分身剣！」シヤク

ヤは4つに分身した。

ササササササーッ

4体は素早くデット ナイトに近寄った。上空でクロスし四方を固める。「へッ。逃げらんねーぜ！トリヤーツ！」シャクヤが刀をふる。

ヒュンヒュンヒュン。

全ての攻撃を目を閉じたままかわすデット ナイト。四方からの攻撃を全てかわす。「そこか！」クワツと目を開き峰打ちを当てるデット ナイト。「ゲフツ……………カハーツ」「フツフツフツ。どうしたね？シャクヤ君。私はまだサヤから刀を抜いていないだよ」「チツ……………油断したか。スピードは封じた。まんざら嘘でも無さそうだな。サテ、どうする」「解析完了。シャクヤ。奴はここにはいない。本体から生体反応は全く感じられない。つまりゴーストだ！気をつけろ！」「……………ありがとう。トウゴウ……………ゴースト？なるほど。さっきの攻撃、どうりで空を斬る感覚しかなかった。奴の出方を見るか」

「終りかね。 以外とあっけないな。 ソナタは」「来いよ！ デット
ナイト。 立ってるだけじゃつまらないだろ？」「左様か。 なら見せ
てやろう。 我が幻術を」

幻術？ ゴーストのマボロシか？ 待てよ。 術ならその反応を追えば本
体に繋がる。

「トウゴウ。 この術の発生ポイントは？」「発生ポイント？ 今、調
べる」

峰打ち、 峰打ち、 体当たり…………… 全ての攻撃を二本の刀でガード
する。

「解析完了！ シャクヤ！ 上だ！ 少し歪んだ空間。 そこに奴は居る」
「上空？ 歪んだ空間？ …………… 見つけた！ そこだ！」

シャクヤは上空に舞い、 少し歪んだ人影を切りつけた。「烈火！ 爆

炎焼！」

ゴゴゴゴーツ

シヤクヤの刀が燃える。「そこだー！セリヤーツ！」「ガフツ……ソナタ……何故」アリーナのデット ナイトが消え、本体が降りてくる。「へへッ。簡単な理屈さ。お前が尻尾を出すのを待っていた。攻撃は全てゴースト。つまりそれを操る信号が近くにある。それを解析したのさ。幻術と言っ言葉で気づいた。そのマボロシを操る信号があると」「見事である。だがワシを地に突かせた褒美もやらんとな」「これからだ。行くぞ！デット ナイト！」デット ナイトはサヤを構える。相変わらずサヤから刀を抜いていなかった。

続く

初めての敗戦 その3

刀のサヤを構えるデット ナイト。灼熱の二刀流を構えて向かっていくシャクヤ。「くらえ！セリヤーツ！……… まだまだ！空を切る感覚。何故だ？」「ヒユツ！踏み込みが甘い！どうしたね？」紙一重でかわすナイト。まるで水面を歩く様に静かにかわした。「ハーツハーツ……… 当たらない。たった一撃も。なんて身のこなし。トウゴウ！奴はまたゴーストを使ってるのか？」「……… イヤ。それが本体だ」「明鏡止水。彼には何も失う物は無い。そんな心境に達すると人は全てを支配できる。相手の呼吸も、考えも」「……… そんな……… じゃーシャクヤは？」「この戦いで目覚めれば可能性はある。つまりあのデット ナイトにはソーサラー軍や死神の束縛をも凌駕している。なぜ死神四天王などに………」「そこに何かあるわけね」「それより今後の戦いが不安だ。おそらくコレと同等。あるいはそれ以上の戦いが待っている。俺や、トウゴウ、キョウカに。見てみる。あいつら。腕を組んだまま微動だにしない。追い込まれたのは我々なのだ」

ようやく自分達の置かれた現状に気づいた三人。シャクヤはまだ気づいていなかった。

「そろそろ良いかね？いい加減かわすのも飽きてきた。君の実力もね」ハーツハーツ。……… 空振りほど力の使う戦いも無いな。いっそ受けてみるか。

「よくぞ覚悟を決めた。それだけは誉めてやろう。こんな調子では死神様など到底勝てないがな」

待てよ。何故だ。なぜ奴に俺の心の声が聞こえる？またトリックか？

「カローン……………もうすでにこのサヤを抜く気は無い。なぜなら君は私を恐れている。恐いな。感情のある者は」「ナツ……………なんでわかるんだ？お前！どんなトリックだ！」「トリック？ハテ、実力勝負だと言わなかったか？ほんの一边を見せたに過ぎないのだがね。あえてそのトリックとやらの正体を言ってしまうえば熟練。鍛練をして熟した者なのだよ。私は」「……………ならなぜ奴に従う？お前ほどの熟練者が。なぜ、ソーサラー軍や死神に従う？」「最後に教えてやろう。私は人の心を守る気も巢食う気も無い。そんな物はくれてやる。名誉も、勲章も、地位も、称賛も。私の前では煩わしいゴミだ。だがそのゴミが良いと言い切る、世界がある。ただそれだけだ。君とやり合うのは、気が向いたからだ。まあ、コレを最後に四天王など辞めるがな。死神とて、たかだかこんな赤子に手を出すとは器が狭いわ！祖国を滅ぼされた？カオス軍が憎い？笑わせるな！関係無いだろう！ただ、非力なただけだ！」

「なんだと！デット ナイト！貴様、正気か？」

均衡が崩れた。死神四天王の均衡が。こいつ……………一体、何者なんだ？

「クワツ……………ホウ。まだ興味があるか？私に。面白い。君にプレゼントしよう。人は無双。2つとして同じ者は無いのだよ。双、有らず」

「人は無双？双、有らず？確か、昔聞いた様な……………誰なんだ奴は」シルバーオックスは昔の記憶を辿った。

「解析完了。シャクヤ。そいつはソーサラー軍では無い。カオス軍一等兵。ムーンドウスである確率、99パーセント」「カオス軍？一等兵？なぜ？」「そう。私はシルバーオックスを育てた師匠だ。君達の実力を確かめたくてな。忍び込んだ訳さ。だが、やる以上、全力で無くてはいかん。若者は全力である事が本分だからな。その可能性を引き出す。それが私の務めだ」

「終わりだ！試合終了！」「夜叉の死神。誰も介入させない。お前
が作ったルールではないか？違うか？」「クツクー……………オノレ、
デット ナイト！イヤ、ムーンドウス！貴様あー！」「できれば
今後の為に全員と手を合わせたかったが、烈火のシャクヤ。初めて
だな。イヤ。君が産まれた日、私はスパイダーから身を隠す為に君
の双子、南条 隼人を奪った。もし、その片割れを捨てたなら、私
が君の師匠だ。さあ、来るが良い。君に教えよう。明鏡止水の極意
を」「……………師匠！ムーンドウス師匠！ありがとうございます」

「ヒョヒョヒョ……………アジな真似を。なぜ奴が一番に名乗り出たか
ようやく解きましたよ。ナイトさん」デット モンクが笑った。「
コレ、無効じゃない？私は早くあのお嬢ちゃんを可愛がりたいたんだ
がねえ。見てらんないよ」デット ワイパーが足を組み直す。「ま
あ、そう言っな。奴の素性を調べないアノ、死神の坊っちゃんがい
けねーんだ。へへへッ……………違うか？」デット メイジが笑う。
「そうだね。見る意味も無さそうだね。アタイはちょっと出てくる
よ。次はアタイの番、だかね」

「動いた。四天王が。腕を組んで見ていた四天王が」

カツカツカツ

「ネエ、お嬢ちゃん。次は貴女が出なさいな。お姉さんが相手になるわ」「上等じゃない？オバサン。シワが目立つわよ。染みも」「フッフッフツ……………可愛いわね。ゾクゾクしちゃう」「……………デット ワイパーとか言ったか？見なくて良いのか？この試合」「私が興味あるのはこのお嬢ちゃんだけよ。楽しみにしてるわ」「……………キョウカ。気をつける！奴は不気味だ」「たまにいますよ。シルバ―オックス。レズビアンとか。変なのにつきまとわれたわねえ！。全く」「経験は？」「バツカねー！あるわけ無いじゃない！」「……………そうだな。すまん」

アリーナではムーンドウスと烈火のシャクヤが立っていた。「……………ようやくわかった。貴方が刀を抜かなかった理由が。師匠！行きます！ウォーツ」

ムーンドウスは落ちた刀を蹴飛ばし背中にさした。「来い！烈火のシャクヤ。南条 列！」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8327z/>

初めての敗戦

2011年12月29日13時52分発行